

【コラム】「小人」は「妖精」か？-グリム童話を考える?-

著者	大野 寿子
著者別名	ONO Hisako, OHNO Hisako
雑誌名	東洋通信
巻	46
号	10・11
ページ	4-7
発行年	2010
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00010970/

オアシス



小人は妖精か？

— グリム童話を考える③ —

大野 寿子

グリム兄弟が一八二二年に収集刊行した『子どもと家庭のためのメルヒェン集』(『Kinder- und Hausmärchen』、通称『グリム童話』)の第五三番(KHM53)「白雪姫」には、寄る辺のない白雪姫を匿い援助する「七人の小人たち」が登場する。このように、体が小さく、超自然的な能力をもった「小人」なるものが登場する話は、『グリム童話』第七版決定版(1897)においては、全二一話中二四話である。以下、『グリム童話』の小人像を概観してゆこう。なお、テキストには第七版を使用する。

* * *

『グリム童話』第七版において、現代日本語の「小人」と訳されている単語(原語はドイツ語)は、大きく分けて三種類ある。まず、Männchen(マンネン)という単語がある。ドイツ語で「男(性)」あるいは「夫」を意味する Mann(マン)に、縮小語尾の -chen(ヘン)が付われ、母音 a がウムラウト(変母音)を起こした語である。-chen は、

日本語の「くちゃん」や「小さなく」という意味合いを添えることができるため、Männchen は直訳すると、「小さな男(性)」という意味となる。つまり「小人」は、その多くが「男性」であることが想定されていることになる。また、第二番目に挙げられるのが Männlein(マンライン)というドイツ語であるが、これも Mann(マン)という、-chen とほぼ同義の縮小語尾が付された単語であるため、同様に「小さな男(性)」を意味しうる。そして、上述の「白雪姫」において登場するのが、第三番目の Zwerg(ツヴェルク)小人なのである。この単語は、英語 dwarf(ドワーフ)とほぼ同義である。『グリムのドイツ語辞典』(1)によれば Zwerg は、「もともとは、ゲルマンの神話や英雄伝説やメルヒェンにおける、小さく超自然的な存在の名称」であるという。この「超自然的な」という形容詞 elbisch に含まれる単語 Elbe(エルベ)とは、現代ドイツ語では Elfe(エルフ)と綴る。「妖精」あるいは「自然の精霊」のことである。古英

語 *oelf* の影響を受けた語らしいが、ゲルマン語系の *Alb* という語にさかのぼることができる。*Alb* とは、「神話における人間と神々と小人の中間的存在」であり、キリスト教改宗後に「夢魔」と解釈されるようになった。ゲルマン神話における小人の名前 *Alberich* に、そのなごりがある。「技巧みな半神」であり、「鍛冶」の才能に長けているようだ。

ヤーコプ・グリムは、『ドイツ神話学』(1835) の諸々の小人についての章を「*Wichte* と *Elbe*」としており、上述の「妖精」に近い *Elbe* (= *Elfe*) と、「ローボルト」山の精霊を意味する *Wichte* とを区別して捉えようとしている。さらに、この「妖精」のとき小さな存在 *Elbe* (*Elfe*) が、『グリム童話』に全く登場していないことは、大変興味深い。いずれにせよ「小人」とは、ゲルマン・北欧神話の天地創造において、大地となった巨人ユミルの屍より生じた蛆を祖とし、その蛆が後に「黒」と「白」とに分かれ、前者が「小人」*Zwerg*、後者が「妖精」*Elf* へと転じていく。ここに、グリム兄弟の考える「ゲルマン的なもの」あるいは「ドイツ的なもの」のイメージの一端があるように思われる。すなわち、「ドイツ的なもの」を探求していた学者グリム兄弟の立場に鑑みると、「妖精」なるものはドイツ的ではなく、むしろ、大地に関わる仕事をする「小人」という小さな存在こそ、ドイツ的であると考えていたのではないだろうかと推測されるのである。

* * *

さて、『グリム童話』(第七版決定版)における *KHM13* 「森の中の三人の小人」には、森の中にすむ *Haulenmännchen* という三人の小人が登場する。この小人たちが、謙虚で善行をなす娘には幸せを、傲慢で怠惰な娘には罰を与える話であり、ヘッセン地方(現在のドイツ連邦共和国の中央部ヘッセン州あたり)で採取されたものである。グリム兄弟が執筆した「子どもと家庭のためのメルヒェン集注釈書」(1822)によれば、*Haulenmännchen* とは、*Höhlen-Waldmännchen* すなわち「穴に住む森小人」のことであり、「ニーダー・ザクセン地方(現在のニーダー・ザクセン州あたり)では、森の穴に住み、まだ洗礼を受けていない人間の子どもを連れ去る小さな者たち」のことであるとの説明が加えられている。しかしながら *KHM13* のハウレの小人たちは、人間の子どもを連れ去る悪人ではなく、人間の運命を決定する役割を果たしている。このような小人は、*KHM64* 「金のガチョウ」にも登場する。ある三人兄弟が相前後して森に入るのだが、そこでそれぞれが「年老いた灰色(＝白髪)の小人」*das alte graue Männchen* に出会う。小人は、食べ物を分けてくれるよう頼むが、上の兄二人は分けてやらなかったため、怪我という不運に見舞われる。ところが、末っ子は小人に食べ物を分けたため、そのお礼に「金のガチョウ」を手に入れる。その金のガチョウが末っ子を、王女との幸せな結婚へと結果的に導くのである。また、*KHM62* 「ミツバチの女王」に登場する「灰色(＝白髪)の小人」も、同様の役割を演じている。

このような運命決定者の役割以外に、グリム童話の小人は、善をなす小人と悪事を働く小人とに分類することが可能である。「善行をなす小人」に関しては、KHM39「ヴィヒテルの小人たち」の三話中第一話が良い例であろう。「小さくかわいらしい裸の二人の小人」*zwei kleine niedliche nackte Mänlein* が貧乏な靴屋のもとにやってきて、靴屋夫婦が寝ている間に仕事を手伝う。小人たちは、仕事のお礼に小さな服や靴をプレゼントされると、飛び跳ねたり踊ったりしながら扉の外へと消えていき、二度と現れなかったという。『ハリー・ポッター』シリーズの、主人にプレゼントをされると仕事から解放される「屋敷僕のドビー」にも些か似ているようである。

また、この「ヴィヒテルの小人たち」第二話は、ある女中にヴィヒテルの小人が、名付け親を頼むところから話が始まる。小人たちのもとで過ごした数日が実際には七年たっていたという、「浦島太郎」によく似た構造の話である。ここに、人間世界で経過する時間と小人の世界で経過する時間との間の断絶が想起される。さらに第三話は、生まれたての赤ん坊を、「小人」が自分の赤ん坊と取り替えるという「取替えっ子」の話である。この点は、グリム兄弟の注釈にある「まだ洗礼を受けていない人間の子どもを連れ去る小さな者たち」と同様であろう。このような「取替えっ子」は英語圏では小人ではなく妖精が行うことが多く、「チェンジリング」という名称で呼ばれている。

「悪い小人」の代表としては、たとえば、KHM161「雪白と紅

バラ」の「神をも恐れぬ小人」*der gottlose Zwerg* を挙げることでできよう。森の洞穴にすみ、冬は地面下で暮らし、春は地上に出てくる存在であり、王子の宝を盗み、王子を熊の姿に変えてしまう悪役である。しなびた皺だらけの顔で、雪のように白く非常に長い鬚³をはやし、赤い火のような目をしているという描写は、二人の少女の名前、すなわち「雪白」の白と「紅バラ」の紅に対応しているかのようである。ただこの話は、『グリム童話』第三版から加わったものであり、しかも口承ではなく書承によるものであることが、グリム兄弟によって述べられている。

さらに、人助けをして見返りを要求する小人もいる。KHM55「ルンペルシュティルツヒェン」では、父親の無責任な口約束のせいで、黄金の糸を紡ぎださねばならなくなった娘のところへ小人がやってきて、その願い聞き入れてくれる話である。小人の援助のおかげで王の妃となった娘は、一度目は首飾り、二度目は指輪を小人に与え、難題をこなす。ところが三度目に娘は、自分の一番目の赤ん坊を担保として小人の援助を受け、薬を金にしてもらう。小人は、自分の名前を当てれば子どもを連れては行かないというのだが、その名前を当てるのが難題となる。森の中の家の前で、歌いながらびよんびよんはねている「まったくもってお笑い種な小人」の歌から、名前がルンペルシュティルツヒェンということが偶然判明する。娘がそれを言い当てると、小人は「大地に片方の足を埋め込み、もう片方をもって自らからだを二つに引き裂く」のである。また、KHM100「悪魔

の陽気な兄弟」では、退役兵士が森の中で「小さな小人」^① *kleines Männchen* に会う。彼は実は悪魔であり、退役兵士に七年間、爪も切らず髪も切らず自分のもつて奉公するよう提案する。兵士は小人の悪魔の申し出どおり、七年間の契約を勤めあげたので、悪魔から「地獄のゴミ」を報酬として与えられる。それらが地上に運ばれると、金に変わるのである。

このように『グリム童話』における小人の人間との関わり方は、まず「運命決定者」、「援助者（時には交換条件つき）」として、あるいは人間にとっての「善行」および「悪行」をなすものとして、人間より上のポジションにいるか、あるいは小人が、表面的には人間への奉仕の姿勢をとつても、さまざまな能力において、人間をはるかに凌駕していることが見てとれる。

* * *

ところで、『グリム童話』に登場する小人のほとんどが、森や山などの「自然」の中を住処としている。その代表的なものが、前述した *KHM53* 「白雪姫」の、森の奥深くの小さな家に住まい、「鉱物を探して地中にもぐり、岩を砕き土を掘る」日常を送っている「七人の小人たち」であろう。ところが、このような小人のイメージが、現代の日本においては、ディズニー・アニメーション映画『白雪姫』(*Snow White and the Seven Dwarfs*)^④の影響が大きいようである。「小人」のみならず、たとえば「魔女」や「人魚」のようなヨーロッパにおける伝承の生き物についても、日本人が思い抱くイメージのほとんどが、二〇世紀アメリカの文化遺

産たるディズニーの映像の影響を度外視しては語れない。このことは、日本における西洋伝承文芸受容を考える上でも、見過ごしてはならない重要なポイントの一つといえよう。

【注】

(1) 正式名称は『ヤーコプ・グリムとヴィルヘルム・グリムによるドイツ語辞典』(*Deutsches Wörterbuch von Jacob und Wilhelm Grimm*)であり、AからFの途中(*Frucht*)までは、グリム兄弟が実際に作成したものである。一八五四年第一巻、一八六〇年第二巻、一八六二年第三巻まではグリム兄弟生前に刊行された。兄弟の死後は後継者に委ねられ、一九五四年に完成した。

(2) ヴィヒテル (*Wichel*) は、前述のヴィヒテ (*Wichte*) と同系である。

(3) 実際は「非常に長い」ではなく「何エレ」もあるという単語で示されている。エレとは昔の尺度であり、一エレが五〇―八〇センチほどである。

(4) 一九三七年にアメリカにて公開。日本公開は一九五〇年。

— おおの ひさこ・文学部准教授 —